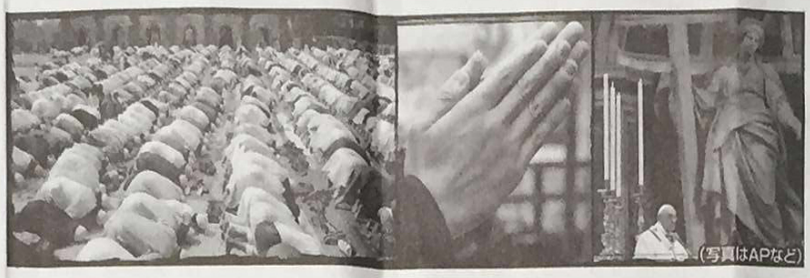
一神教は不寛容なのか

論点スペシャル

日本人人質事件を起こした過激派組織「イスラム国」の残虐非道により、イスラム教を危険視する見方がある。唯一絶対神をあがめる一神教であることから、「一神教は不寛容で暴力的」との批判も聞かれる。そうなのだろうか。宗教者や宗教研究者に見解を聞いた。



(写真はAPなど)

対話には忍耐必要

カトリック教会横浜司教 **梅村 昌弘** 氏

うめむら・まさひろ　1985年カトリック司祭、91年法王庁立ウルバノ大学で博士号取得（教会法学）。99年から現職。62歳。

かつては、カトリック教会も他の宗教に対して不寛容だった。同じキリスト教の他の教団や教派に対してでさえ、決して寛容であったとは言えない。聖地エルサレムをイスラムから奪還しようとした十字軍や、宗教改革後、カトリックとプロテスタントとの間に争いや戦争が絶えなかったヨーロッパの歴史を振り返っても容易に分かるだろう。

それでも教会の現代化を図るため、公会議としては1世紀ぶりに開催された「第2バチカン公会議」（1962～65年）で、教会は大変貌を遂げた。社会と世界における教会の存在意義を見直した。教会は自己のために存在するのではない、他者のために存在するのだということに改めて気づかされた。すべての人の救いのために、あらゆる人々の幸せのためにあるのだと。

そして、キリスト教の教団・教派の一致に向けた運動や、諸宗教との対話が活発になった。排他的ではなく、多様性の中の一致をめざしたのだ。

キリスト教の正当性やキリスト教内での正統性だけをひたすら主張し、不寛容な態度をとれば、当然、そこには排他性が生まれ、争いの火種となる。自分だけが正しいという態度から来る傲慢と排他性こそが問題だ。かつてのカトリック教会は勝利主義に陥っていたと言えよう。

第2バチカン公会議は、自らの教会をして「罪人の教会」と呼び、絶えず「回心」することの必要性を説いた。まずは自らの過ちを謙虚に認め、自らを正し、他に臨むべきことに気づいた。

「カトリック教会は、諸宗教の中に見出される真実で尊いものを一切排斥しない」としたうえで、「教会は、民族や人種、身分や宗教の違いに起因するすべての差別や圧迫をキリストの精神に反するものとして退ける」と公会議は述べている。さらに、イスラム教との間に何世紀にもわたって「不和と敵意」があったことを認め、「ゆるし合い、互いに理解し合うよう努め、社会正義や平和と自由をすべての人々のために共に守って行かなければならない」と勧告した。

ただ、対話は、一朝一夕に成果を生むものではなく、忍耐が必要だ。

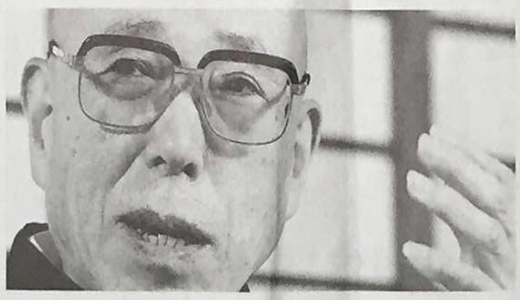
現法王フランシスコもイスラム教に対する尊敬の念を忘れてはいない。イスラム教預言者ムハンマドの風刺画について、表現の自由は尊重すべきだとしながらも「行き過ぎれば他人の宗教を侮蔑することになる」と戒めている。

日本では宗教がらみで何か事件が起こると、政治家ですら「一神教は怖い」と公言して憚らない。残念なことだ。われわれの信じる神は、万物の創造主として自ら作られた全ての者を、無条件に無償の愛をもって慈しんでおられる。

（調査研究本部主任研究員　秦野るり子）

勝手な解釈 戒め

東大寺長老 **森本 公誠** 師



もりもと・こうせい　初期イスラム史にも詳しい。東大寺第218世別当などを歴任。著書に「イブン＝ハルドゥーン」「聖武天皇」など。80歳。

京大でイスラム学を選んだ。仏教と相反する宗教を学べば、かえって仏教の現代的意義もわかるのではと思った。2003年、外務省派遣ミッションでエジプトへ行った折、カイロ大学教授が教典コーランについて述べた言葉が印象に残った。自分が幼い頃、非合法のムスリム同胞団の幹部だった叔父が「読む者によって神の書にも悪魔の書にもなる。勝手な解釈をしてはならない」と戒めたという。

例えば「お前が殺したのではない。神が殺さしめた」との文言があり、テロ行為の正当化に利用される。だがこの啓示が下った時の預言者ムハンマド（570頃～632）の時代的立場に照らして理解すべきだ。信徒らとともに故郷メッカを追われたムハンマドは、信徒らを食べさせる手段としてメッカの隊商を襲う決意をし、同郷人に刃を向けねばならなかった。苦渋の心境を救う意味でか、この啓示がムハンマドに下った。テロ奨励とは違う。

問題になるのはジハード。「神のために奮闘努力する」が元来の意味。当初は教徒の義務とされ、征服戦争に向かったが、後世にまとまる教徒の義務「五行」からは外れた。11世紀後半以降になると、「ジハードは自我との戦い」と断言する神学者も現れ、大きな影響を与えた。イスラム圏は一般的には温厚な教徒の住む世界になった。

その頃、欧州からキリスト教徒の十字軍が入って来て、エルサレムのモスクは殺されたイスラム教徒の血の海と化した。イスラム教徒は戦うことを呼び覚まされ、反十字軍運動が起こった。イスラム教徒にとってその記憶は生々しい。

どちらも一神教だが教えにこだわると、自分に正義があり、相手は不正義・悪という考え方に陥りやすい。他者から見れば寛容性が望まれる。先の仏週刊紙襲撃事件を巡っての様々な反応を見ても、異なる思想や宗教の共存の難しさを感じる。

「イスラム国」の表記は当初から問題だと思った。大半のイスラム教徒は彼らの過激思想についていけないだろう。彼らの言葉ではなく行為を見ればその目的が何かわかるはず。目的のためにイスラムの宗教と歴史を利用しているとしか考えられない。国家的権力として樹立されてしまうとその影響は計り知れない。

仏教の開祖、釈迦の教えの基本は非暴力だ。ガンジーが非暴力で英国からの独立を果たしたのもこれにつながる。釈迦が国王のために説いたいわゆる護国の経典がある。支配者としての心得を説いている。相手に非を求めるのではなく、自己の責任を重視している。

日本では千数百年にわたって仏教が根付いていたが、明治政府は尊皇思想を強調するあまり、神仏分離策で仏教の意義を看過した。近代化に仏教は無用としたのだろう。それから77年後の敗戦に至る日本の運命は周知の通りだ。

（編集委員　鶴原徹也）

レッテル貼りは問題

同志社大教授 **小原 克博** 氏

こはら・かつひろ　専門はキリスト教思想・宗教倫理・一神教研究。2010年から同志社大一神教学際研究センター長。49歳。

一神教にはユダヤ教、キリスト教、イスラム教があり、それぞれの中にもまた多様なのに、十把一からげに「一神教は不寛容」と言うのは、多様な実態を見ようとしない議論であり、問題がある。ヘイトスピーチと同様、敵視する相手に分かりやすいレッテルを貼り、単純化・平板化して批判するやり方だ。これでは「イスラム教は怖い」といった虚像をまき散らすことになってしまう。

もしある宗教の暴力性を批判するなら、歴史的、具体的に事実関係を検証し、例えば「十字軍時代のキリスト教のこういう行為は暴力的だった」と言わなければならない。だが、キリスト教の歴史が常に暴力の連続であったわけではない。

一神教批判には、必ずそれとセットで、「日本の宗教は寛容だ」といった日本を持ち上げる主張が見られる。そこには日本を礼賛したいために一神教をけなす構図があり、文化ナショナリズムがある。要するに日本文化論。こうした自己反省を欠いた自国文化の語り方は危ない。異質なものに対し、理解ではなく、不信感や敵意を強めるからだ。

私は、宗教の違いに関係なく、人間は暴力的で不寛容になる場合がある、と考える。アジアでは仏教徒がイスラム教徒を攻撃することがあるし、日本の戦時下には、国家が海外で神社参拝を強制した。だから、どんな時、どんな条件で不寛容な状況が生まれるかを教訓として考える方が大事だ。

一つは、人が切羽詰まった時だ。政治的、軍事的に追いつめられた状況が長く続いたり、社会で「自分の居場所がない」と感じたりすると、何とかしようと過激になる。もう一つは、宗教が国家などの世俗権力と結びつくと、攻撃的になりやすい。

一方、我々が使っている「寛容」も、啓蒙主義以降の政教分離を前提とした西洋近代の概念であることを自覚すべきだろう。宗教を「括弧」に入れて個人の内面の問題とし、それで多様性を維持しようとする姿勢だ。実はユダヤ教、キリスト教、イスラム教にも、西洋近代の寛容が生まれるはるか以前から、寛容に関する対応概念があった。支配・従属関係はあったにせよ、「寄留の民」を大切にするといった姿勢は古くからあった。近代的な寛容だけで多様性が維持できないなら、こうした古くからの概念を含めて寛容を考え直してみる必要があるだろう。

いずれにしても、少子高齢化が進む日本には、今後さらに東南アジアのイスラム教徒やカトリックのフィリピン人などが労働者として入ってくる。そろそろ島国的な発想の一神教批判を〝卒業〟し、異なる他者と向き合い、日本で少数派が居心地よくいられるために何ができるか、考えていく段階に来ているのではないか。

（文化部　植田滋）

〒100・8055 読売新聞東京本社編集委員室 kaiseisu@yomiuri.com